

## 『社会言語科学』特集論文の募集のお知らせ

学会誌編集委員会では、以下の要領で特集「言語・コミュニケーションの学習・教育と社会言語科学—人間・文化・社会をキーワードとして—」（エディター：小林ミナ、浜田麻里、三宅和子）の論文を募集いたします。特集に投稿された論文は、通常の投稿論文と同じく、査読を経て掲載が決定されます。なお、特集では最終投稿期限が設定されていますのでご注意ください。投稿論文は基本的に投稿され次第、査読作業に入ります。したがって、より早く投稿された論文ほど、査読が早く済み、論文を修正する機会が多くなります。最終投稿期限は特集の投稿を受け付ける最終期限という意味ですので、早く投稿できる方は早めに投稿されることをお勧めします。刊行時期までに採用とならないときは、特集号以外の号に掲載されることもありますのでご了解ください。

特集論文の最終投稿期限：2008年12月10日（水） [郵送の場合消印有効]

（投稿規定・執筆要項は2007年7月20日に改訂されていますので、ご注意ください。）

掲載号の発行：2009年8月（第12巻1号に掲載予定）

特集論文の投稿先：

E-mail：edit06@jass.ne.jp

郵送：〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 東京大学大学院総合文化研究科  
社会言語科学会編集委員会委員長 生越直樹

\*投稿に際しては、メールの件名あるいは封筒の表に「特集投稿論文」と明記してください。

[特集の趣旨]

言語・コミュニケーションの学習・教育と社会言語科学  
—人間・文化・社会をキーワードとして—

特集エディター：小林ミナ、浜田麻里、三宅和子

本特集では、言語・コミュニケーションの学習や教育について、人間・文化・社会をキーワードとする社会言語科学との関連で考えたいと思います。

言語は、記号の体系、あるいは脳の中に存在する知識というだけではなく、現実社会において人と人とのコミュニケーションに用いられるという側面を持っています。また、言語やコミュニケーションそのものが人間の文化の一部をなしています。

『社会言語科学』においては、そのような現実の社会におけるさまざまなコミュニケーションのありようが記述されてきました。言語を現実社会の中において捉えてみようとする試みの中で、従来の静的で規範的な言語観は問い直しを迫られ、言語の動的で相互構築的な側面が徐々に明らかになってきました。

こういった新しい言語観、コミュニケーション観を前提としたとき、言語の学習や教育はどのように行っていけばよいのでしょうか。その議論は本誌ではまだ十分に行われていないようです。

たとえば、動的で相互構築的な言語観を前提とした言語教育の実践とはどのようなものなのでしょうか。さらに、教育の内容が、動的で相互構築的な言語観を前提としたものであるなら、その評価もまた、静的で規範的な言語観を前提としたものとは異なるはずです。そのような評価は、いったいどのような基準で行われるのでしょうか。

一方、言語教育の領域で得られた知見によって言語理論そのものが見直しを迫られる可能性もあるでしょう。言語というものはいかなるものか、言語やコミュニケーションの記述はいかにあるべきかなど、言語教育学の側から今後の社会言語科学の研究に対して非常に興味深い示唆をもたらすこともできるのではないのでしょうか。

さらに、言語教育そのものが人間形成の支援であり、人間によって行われる文化的、社会的な営みであるという視点も重要です。言語やコミュニケーションの学習を通して、人は何を学ぶことができるのでしょうか。言語やコミュニケーションの教育には、社会的、文化的にどのような意味があるのでしょうか。このような視点に立てば、「非母語話者に対する外国語教育」と「母語話者に対する国語教育」の関係もいま一度捉え直すことができるかもしれません。

本特集では、以上のように、言語教育学から社会言語科学への問題提起や新たな課題の発見・提供、社会言語科学から言語教育学へ課題を投げかけるもの、社会言語科学の成果から言語教育学を問い直すもの、等々、言語・コミュニケーションの学習や教育を対象とし、社会言語科学との関連で考えることで新たな地平を切り拓こうとする論文を募集します。

論文の形態や研究の方法論は問いません。対象としては、母語／第1言語の学習・教育もあるでしょうし、外国語／第2言語の学習・教育もあるでしょう。理論研究も実証研究も、そしてもちろん実践研究も大歓迎です。様々な分野からの投稿により、社会言語科学と言語の教育・学習との関係が複相的に描き出されるような特集号になる

ことを期待しております。

-----